

エステル書

1,1a

1
1a

アハシュエロス^{*}大王の治世の第二年⁽²⁾、ニサンの月の第一日、モ⁽³⁾
ルデカイ⁽⁴⁾は夢を見た。かれの父はヤイル、その父はシメイ、その
父はベニヤミン族のキシであった。⁽⁵⁾モルデカイはユダヤ人で、⁽⁶⁾
スサの町に住み、宮廷に仕える大人物であった。⁽⁷⁾かれはバビロ

ンの王ネブカドネザルが、エルサレムからユダの王エコニヤもろともに捕えて来た捕虜のひとりであった。

さて夢はこうである。見よ、地上には騒ぎとどよめき、雷と地震、および混乱が起⁽⁸⁾
こっている。⁽⁹⁾見よ、ふたつの巨大なりゆうが進みいで、恐ろしくほえ、まさに相戦⁽¹⁰⁾
おうとしている。⁽¹¹⁾その叫びを聞いて、すべての国は戦争の準備を整え、義の民と戦⁽¹²⁾

【注】(1) 1^aは A. Rahlf's 編のギリシア語「七十人訳聖書」による。ブルガタ訳では 1²—1⁶。聖ヒエロニムス⁽¹³⁾はブルガタ訳のこの部分の前に次の文を加えている。「通用本（七十人訳のこと）はこれをもつて始まっている

184

エステル書

185

エステル書

1,1f

186

が、これはヘブライ語本にも、いづれの訳本にも見当らない。

(2) ギリシア語訳のアルタクセルクセスは正しくない。ヘブライ語本によるアハシュエロス王とはクセルクセス王のことであり（エズラ 4⁶参照）、その治世は紀元前四八六年から四六五年に及ぶ。本訳においては人名はヘブライ語本と全般的に一致させた。「第二年」は紀元前四八四年にあたる。

(3) ユダヤ暦の第一の月で、太陽暦では三月と四月にまたがる。

(4) この名の語原はおそらくバビロニアの神マルデウクから出たもの。セシバザルとともにバビロニアから帰ったユダヤ人の中にもこの名は見られる（エズラ 1⁸—12²、ネヘミヤ 7⁷参照）。エジプトおよびバビロニアに住むユダヤ人は、宗教とは無関係に、このような異邦人の名を用いていた。

(5) シメイとキシはダビデとサウルの時代のベニヤミン族の者と思われる（サムエル上 9¹—14⁵¹、同下 16⁵、列上 2⁸—36¹参照）。

(6) モルデカイは純粹なユダヤ人であり、ハマンはユダヤ人排斥主義者（3¹⁰）。なお「モルデカイ」の捕われた時については 2 注⁴ 参照。

(7) バビロニアの東、エクバタナの南に位する町。昔のエラムの首都で、ペルシア王たちの避寒地。

(8) ヘブライ語本には、この夢についての記事は何もない。聖書には、しばしば夢で将来を預言する事件がしるされている。たとえばアビメレク（創 20³）、ラバン（同 31²⁴）、ヨセフ（同 37⁵—11）、ファラオの重臣（同 40⁵—22）、ネブカドネザル（ダニエル 2¹—4¹—24）、ダニエル（7¹²—16）の夢などがある。著者はおそらくこれらの旧約聖書の影響を受けたのであろう。巻頭から神の特別な摺理を夢の形式で示し、その解決を巻末（10³⁴—1³⁴）で与えている。なお新約聖書中にも夢に関する記事は少なくない。たとえば聖ヨセフ（マタイ 1²⁰—24）、博士たち（同 2¹²）などの夢。

(9) ヘブライ語の旧約聖書には恐ろしい動物を示す種々の語があるが、ギリシア語本にはだいたい「りゅう（ドラゴン）」の一語だけしか見られない。ここではりゅうは神話的な怪獣をささないで、実在の動物をさしている。⁽¹⁰⁾ この表現は「神の民」および「主の民」と同義。これに反して「すべての国」は異邦人、すなわちアハシュエロスの王国の人々をさす。ギリシア語を原本とする聖書ではユダヤ人をさす場合は「聖なる民」（知 10⁵、マカバ以下 15²⁴）、「聖人の民」（ダニエル 8²⁴）、および単に「義人」（知 16²³ 18⁷—20）または「聖人」（同 18¹—5）とある。

(11) 悲しい圧迫の日が、勝利と安泰の日に変わる（知⁵。参照）。

(12) モルデカイもフアラオ（創^{41₈}）やネブカドネザル（ダニエル^{2₂}）と同じくその夢を解釈しようと試みる。

(13) 「記録の書」は日誌の類で⁶—¹⁰₂にも出る。著者は本書を書くのに際し、この「記録の書」を一資料として用いたと思われる。

(14) 3注¹参照。

(15) ブルガタ訳^{12₆}のあとに「ここまではまえがきである」と追加してある。

(16) アハシュエロスすなわちクセルクセスの父ダレイオス一世の時代に、ペルシア王国は、最大の地域を治めていた。ダニエル^{6₂}では州の数は百二十。ヘブライ語本は「州」をさすのに「メディナ」を用いている。この「州」は諸州を治める総督の領域と異なる。本書では太守領の総督と、州の知事を区別している（^{3₁₂ 8₉ 9₃}）。ダレイオスの時代でも太守領は三十一以上はなかった。太守領はある程度の自治制をしき、しばしば総督を自分らで選び、またその土地の宗教を守ることを許した。

(17) この城はスサの町を防御するために築かれたもので、町そのものからも、またアバナニにあった王宮からも区別された特別な地域であり、王と親衛隊は危急時にそこに避難した。エステル書の事件は、王宮と城の中で展開される（^{3₁₅ 8₁₄ 9₁₁}参照）。なお「スサの城」（^{1₅ 3₁₅ 9₁₂}）といえば、スサの町全体を意味することもある（^{3_{15b} 9₁₅}参照）。

(18) ヘブライ語で「ミシテ」。本書では二十回、その他の旧約聖書では二十四回出る（創^{40₂₀}、列上^{3₁₅}その他）。

うとしている。「見よ、やみと暗黒の日、苦しみと悲しみ、悩みと大混乱が地上をおおい、「すべての義の民はおののき、ふりかかる災いを恐れ、滅亡を覚悟し、神に向かつて叫んでいる。」その叫びは、あたかも小さな泉のように、あふれんばかりの水をたたえる大河となつた。「やがて光があらわれ、太陽がのぼり、いやしい者は高められて、高貴な者を食いつくした」。

この夢を見て、モルデカイは目をさました。かれは夢を心にとどめ、その中に現われたすべての出来事によって神が何を計画しておられるかを知ろうとして、また夜をむかえた。

さて、モルデカイは、宮廷で番をする王のふたりの侍従ビグタ¹とテレシ^{*}とともに宮廷に住んでいた。¹²かれはかれらの話していることを聞いて、その計略をさぐり、かれらがアハシュエロス王に手を下そうとしているのを知り、これを王に密告した。²王がふたりの侍従を取り調べると、自白したので、死刑に処した。³王は記録の書¹³に、これらの事をしるし、モルデカイもまたこれを書き残した。⁴王はモルデカイに宮廷に仕えるよう命じ、贈り物を与えた。⁵しかし王に重く用いられているアガグ人ハンメダタの子ハマン¹⁴は、ふたりの侍従のために、モルデカイとその民を害しようと企てた。¹⁵

の將軍および貴族と諸州のつかさたちがこれに列席した。その時、王は百八十日の長期にわたってその盛んな國の富と、王威の偉大さと、そのはなやかさとを示した。⁽¹⁹⁾

これらの日が終わった時、王は宮殿の園の中庭で、スサの城にいる大小のすべての人⁽²⁰⁾のために、七日間の酒宴を設けた。そこには白綿布のカーテンと青色のたれ幕があり、それらは良質のリンネルと真紅の織物でできたひもをもつて、銀の輪と大理石の柱に結ばれていた。また金銀の長いすが、まだら石や大理石で、また真珠貝やいろいろな宝石で切りはめ細工を施したゆかの上に置かれていた。⁽²¹⁾それで異なった金の杯にぶどう酒がつがれ、王の寛大さにふさわしく、王の用いるぶどう酒が惜しみなく与えられた。

飲酒は命令のままに行なわれ、だれも無理にしいることをしなかつた。王が各人の好みに任せるように、宫廷のすべての役人に命じておいたからである。

王妃ワシテもまたアハシュエロス王の宮廷内で、女たちのために

ワシテの追放

酒宴を設けた。⁽²⁴⁾七日目に、アハシュエロス王は心がぶどう酒に浮

かれ、身近に仕える七人の侍従メホマン、ビズタ、ハルボナ、ビクタおよびアバグタ、ゼタル、カルカスに命じて、王妃ワシテに王妃の冠をつけさせて、王の前に連れてくるように言った。これは彼女が美人であったので、その美しさを民らと大臣たちに見せるためであった。⁽²⁵⁾しかし王妃ワシテは侍従らが伝えた王の命令に従

つて来るのを拒んだ。それで、王はひじょうに憤り、怒りに燃えた。⁽²⁶⁾

(19) 考古学的研究によつて、酒宴が設けられた場所は、すばらしい宮殿の庭園であったことが確認される。この宮殿の建造は、ダレイオス一世の時代、すなわち紀元前五〇〇年に着手し、数年後に完成した。宮殿の描写は少しき大きさに見えるが、考古学的新発見とだいたいにおいて一致している。

(20) 「大小」とあるのは、おとなと子どもの意ではなく、高位の者(3節)と、城内にいる位の低い者すべてをさす。

(21) 著者はカーテンやたれ幕、柱、長いす、ゆかななどを列記して巧みに豪華な宮殿を描写している。カーテンやたれ幕は水平に、また垂直にかけてあるが、これは熱い太陽熱を防ぐためである。このペルシアの宮殿のぜいたくさはギリシアの歴史家ヘロドトスの著作にもあらわれている。

(22) ヘブライ語本とギリシア語訳は、飲酒のことのみをしるしているが、ブルガタ訳(7節)は、「食べ物は次

次に異なる器に入れて出された」と、食べ物のことも加えている。

(23) ヘブライ語の「ダト」。本書では十九回用いられているが、常に王の名においてなした命令、法律、または規定を意味している。しかしエズラ書とダニエル書中のアラム語の部分では、ある時は神の法、ある時は王の命令をさしている(エズラ8:36)。ペルシア人は飲酒を強制する風習があつたが、ここでは王の命令によって、そのようないことが禁じられている。

(24) 王妃ワシテに関するこの物語は、歴史上疑わしい点がないではない。なぜならヘロドトスによるとアメストリスがクセルクセスの「妻」であったからである。しかしペルシアの王たちは、しばしば正妻として数名の王妃を持つていた。アメストリスはこれらの正妻のひとりであり、一般的の歴史は彼女だけについてしてゐる。これに反し、エステル書の著者は、アメストリスが本筋と関係がないので、意識的に彼女の名をはぶいて、ワシテだけについて述べている。

(25) 七の数はペルシア人にとっても、ヘブライ人にとっても象徴的な聖なる数である。本書の他の箇所にも出る(14:2)。侍従たちの名は原本や訳本によつてまちまちである。

(26) 王妃でも王命を拒むことは反逆罪と考えられている。アハシュエロスの性格描写は、一般的の歴史と一致し

21

の時、妻たる者はことごとく、その夫を上下の別なく敬うでしょう」。

この進言は王と大臣たちの気に入り、王はメムカンの勧めに従つた。²² 王は全州に、おのおのその州の文字で、またおのおのその民のことばを用いて、すべて男たる者が、

ている。かれは衝動的であり肉欲的であり、かつ高慢であったが、その一面、寛大であったので、民に愛せられたと、ヘロドトスは述べている。あるユダヤ人の聖書解釈者は、王妃が王の前に出るのを拒んだのは、王妃の冠だけをつけて裸体で出てくるのを王が命じたからであろう、と推測している。

(27) 複雑な事件については、特別な専門の学者の会議があり、王はこれに諮問して決定するのが普通であった。しかしからは天文学者ではなく、歴史と国の大慣習と法律に明るい人々である(ダニエル^{3:2})。「時を知つている」とは、星の観察者ではなく、歴史と法律に造りの深い人をいう。

(28) これは専門的表現で、王の会議に参列することを意味する(サムエル下^{14:24-28}³²、マタイ^{18:10} 参照)。

(29) メムカンは、ワシテの罪が国家的なものであり、国民もその判決に関心を持つてることを巧みに述べている。かれは、ワシテをゆるすことは王のためにもまた国家のためにも悪いので、ワシテを処罰するように勧める。同じ理由によってハマンはモルデカイとユダヤ人を(3:8)、エステルはハマンを(7:4)減ぼすように王に願う。

(30) 原則としてペルシアとメディアの法律は変更できることになっていた(ダニエル^{6:1-10} 参照)。しかし実際的には王の絶対権をもつて、ある程度、緩和することができた。

(31) 広い地域を占めるペルシア王国では、多くの種類の国語が用いられていた。中でも主要語はペルシア、エラム、アッカド、エジプト、フェニキア、ギリシアなどのことばであり、おのおの異なった書き方である。ベヒストゥンにあるダイオス一世の大きな石碑には、同じ文がペルシア、エラム、バビロニアの三つの異なったことばで刻まれている。

20

『王妃ワシテは、アハシュエロス王からかれの前にくるように命ぜられたのに、行かなかつたではありませんか』と言ふでしょう。王妃の行ないを聞いたペルシアとメディアの大臣の夫人たちもまた、きょうを期して、王のすべての大臣たちに同じ事を言うようになり、軽べつと憤りとがみなぎるでしょう。もし王がよしとされるならば、王妃ワシテは今後、再びアハシュエロス王の前に出てはならないと命令を下し、これを変更できないようにペルシアとメディアの法律に書き入れ³⁰、そして彼女にまさる者に王妃の位をお与えください。王の国がいかに広くとも、勅令が津々浦々に知れわたると、そ

そこでメムカンは王と大臣たちの前で答えた、「王妃ワシテは、王に対してもばかりでなく、全大臣とアハシュエロス王の全州のすべての民に対しても悪い事をしました。王妃のこの行ないは、すべての女たちに知れわたり、彼女らはその夫を軽べつの目で見、『王妃ワシテは、アハシュエロス王からかれの前にくるように命ぜられたのに、行かなかつたではありませんか』と言ふでしょう。王妃の行ないを聞いたペルシアとメディアの大臣の夫人たちもまた、きょうを期して、王のすべての大臣たちに同じ事を言うようになります。もし王がよしとされるならば、王妃ワシテは今後、再びアハシュエロス王の前に出てはならないと命令を下し、これを変更できないようにペルシアとメディアの法律に書き入れ³⁰、そして彼女にまさる者に王妃の位をお与えください。王の国がいかに広くとも、勅令が津々浦々に知れわたると、そ

そこで王は時を知つてゐる知者に向かつて、——王は法律と裁判に明るいすべての者に相談するならわしであつた。——そのうちにカルシナ、セタル、アデマタ、タルシシ、メレス、マルセナおよびメムカンがいた。かれらは王の側近でペルシアとメディアの七人の大臣であり、国の第一位に位し、王に謁見²⁸し得る者であつた。——「王妃ワシテは、侍従らが伝えたアハシュエロス王の命令に従わないのだが、法律によつて彼女をどうすればよいか」と言つた。

自分の家を治めること、また男は自分の民のことばで話すべきことを書き送った。⁽³²⁾

2
1

その後、アハシュエロス王の怒りがおさまり、かれはワシテと、

エスティル、

また彼女がなしたこと、および彼女に関して定めたことを思い起

王妃となる

く美しい処女たちを捜し求めましょう。

（1）「なにとぞ王は国のお州に委員を任命し、若く美しい処女をことごとくスサの城の婦人室に集めさせ、女をつかさどる王のかんがんへガイの監督のもとに処女たちをおき、彼女らに化粧品をお与えください。」

（2）「そして御意にかなうおとめを、ワシテの代わりに王妃としてください。」

（3）「王はこの進言を聞き入れ、そのとおりにした。」

さてスサの城に、モルデカイという名のひとりのユダヤ人がいた。かれはヤイルの子であった。ヤイルはシメイの子、シメイはベニヤミン族のキシの子であった。モルデカイはバビロンの王ネブカドネザルが捕えて行つたユダの王エコニヤとともに捕えられて行つた捕虜のひとりで、エルサレムから捕え移された者である。かれにはおじの娘ハダッサ、またの名はエスティルがあつた。彼女には父も母もなかつたので、かれが彼女を養育していた。このおとめは姿がよく、美しかつた。彼女の父母が死んだ時、モルデカイは彼女を引きとつて養女としたのである。

192

エスティル書

193

エスティル書

（32）この句は七十人訳はない。ブルガタ訳は「これをすべての民に知らしめること」となつてゐる。ユダヤ伝説によると、本節のことばは、「夫は異なることばを話す妻をめとつても、つねに自分の國のことばを用いるように命じられた」とことを意味する。

【注】（1）この「近習」の語は6³にも出る。
（2）婦人室に多くの女たちを持っているということは、王の偉大さと富を示すものである。イスラエルの王たるものこのような慣習を持っていた。ソロモン王のときは、婦人室に約一千名の女をおいていた（列上11³参照）。

（3）アハシュエロス王は弱い性格の持ち主で、近臣の勧めを容易に受け入れた。メムカンの勧めに従つたこの王は（1²¹参照）、またハマン（3¹⁰参照）やエスティル（7¹⁰9¹⁴）の勧めにも従う。

（4）本節ではモルデカイも捕虜のひとりとしてとらわれて行つたとあるが、実際はモルデカイ自身が捕虜となつて連れ行かれたのではなく、かれの家族が捕虜となつてバビロニアに連れて行かれ、そこでかれは生まれたとも考えられる。このバビロニア囚はネブカドネザルによって紀元前五九六年に行なわれ、最後のユダの王エコニヤもその時とらわれの身となつた（列下24¹⁵参照）。この節のエホヤキンはエコニヤと同一人物）。

（5）ヘブライ名は「ハダッサ」（ちの木）、バビロニア名は「エスティル」。エスティルはおそらくバビロニアの女神「イシュタル」からか、あるいはペルシア語の「スター」（星）から出た名と思われる。

（6）本節前半のこの句は著者が好んで用いる表現（1²¹2⁴17参照）。エスティルの身に起こつたこのことは、ダニエル書1³～2¹の三人の若者の場合と似ている。

2,10

エスティル書

ことや親族のことくだれにも知らせなかつた。これはモルデカイが、彼女にそのことを知らせてはならないと言いふくめたからである。⁽⁷⁾ -モルデカイは、エスティルの様子や、

また彼女がどのようにしてゐるかを知るために、毎日、婦人室の庭の前を歩いていた。

さて、おとめはおののおのの婦人のための規定に従つて、十二か月を送つた後、順番にアハシュエロス王の所へ行くようになつてゐた。これはもつ薬の油を用いる化粧期間が六か月、香料や婦人の化粧品を用いるのが六か月ときめられていたからである。⁽⁸⁾ -こうしておとめが王の所に行く時には、婦人室にある物はなんでも望みのままに与えられた。

それを持つて王宮に行くことができた。⁽⁸⁾ -おとめは夕方出て行き、あくる朝、第二の婦人室にもどり、そばめたちをつかさどる王のかんがんシャシガズの監督のもとにおかれ

た。彼女は王の気に入り、名ざして召されないかぎり、再び王の所へ行くことはなかつた。

さて、モルデカイのおじアビハイルの娘、すなわちモルデカイが引きとつて養女としたエスティルに、王の所に行く番がまわってきた。その時、彼女は婦人たちをつかさどる王のかんがんヘガイが勧めたもののかには、何も求めなかつた。エスティルを見る者はみな彼女が気に入つた。⁽⁹⁾ -エスティルがアハシュエロス王の宮殿に召されて行つたのは、王の治世第七年の第十の月、すなわちテベテの月であつた。⁽¹⁰⁾ -王はほかのすべての婦人

たちにまさつてエスティルを愛した。そして彼女はすべての処女たちにまさつて王的好意といつくしみとを得た。それで王は彼女の頭に王妃の冠をかぶらせ、彼女をワシテの代わりに王妃とした。⁽¹¹⁾ -そして王はすべての大臣と侍臣たちのために大酒宴を催した。これがエスティルの酒宴である。またかれは各州に休日を与へ、またその寛大さを表わして贈り物を与えた。

(7) モルデカイは、時機の来るまで、民と親族のことをかくすことがよいと言つて、彼女にこれをかくさせる。これはダニエルとその友人がつねにユダヤ人としてふるまつたのと大いに異なる。

(8) 婦人室から王の私室に行くときは、おののおのの望みどおりに、身につける飾り物が与えられた。ルーブル博物館にはスサの墓から発掘されたペルシア時代の金の腕輪や真珠などの首飾りが保存されている。

(9) ブルガタ訳は本節後半で「實に彼女は姿がはなはだうるわしく、その信じがたいほどの美しさによつて、すべての人の目にこころよく、愛らしく見えた」と誇張してゐる。

(10) このことは、ワシテの事件からすでに四年経過した紀元前四七九年の十二月、または翌年の一月に起つており、史実と一致している。歴史上、アハシュエロスは紀元前四八一年の秋に、ギリシアとメディアの第二の戦争に出征し、ミカレの敗戦後、四七九年の夏の終わりごろ、再びスサにもどつた。「テベテ」はバビロニアからの外来語で、旧約聖書中、本節のみに見られる。テベテは十二月から一月にまたがる。ユダヤ人はバビロニア幽囚後、その土地の言語を用いて月を呼んだ。

(11) 著者はユディト書の著者とは逆に^{(12)→(13) 参照}、ユダヤ人の律法を無視してエスティルが異邦人の王妃となり、ともに生活することを大胆にしるしてゐる。七十人訳^{(4)→(5) 参照}では、エスティルはやむをえず、異邦人と生活するようになったとなつてゐる。

(12) このヘブライ原語には祭日、免税、恩赦、強制労働や兵役の免除などの意味もある。

デカイにこのように言つても、かれは耳を傾けなかつた。それでかれらはモルデカイが自分はユダヤ人であると言つたことが、言いわけになるかどうかを知ろうとして、これをハマンに告げた。—ハマンは、モルデカイが自分の前でひざまずきもせず、身もかがめないのを見た時、ハマンは怒りに満ちた。—しかしあれはモルデカイひとりにだけ手をくだすことをいさぎよしとしなかつた。かれらがモルデカイの属する民をハマンに知らせたので、かれはアハシュエロスの全王国に住むユダヤ人、すなわちモルデカイの属

(13) 本書にしばしば出る「王の門」は、あるときは建物自体をさし(4², 5⁹, 6¹² 参照)、ある場合は、宮廷の門所で仕える人々の役目(3² 参照)をさす。

(14) 七十人訳ではさらに詳しく、「モルデカイは彼女とともにいたころ」彼女に神を恐れ敬い、そのおきてを守るように(命じた)。それでエステルはその生活を変えなかつた」とエステルの敬神行為がしるされている。

(15) ペルシア時代によく用いられた死刑の方法。

【注】(1) 「ハマン」はイラン語で「尊敬すべき」の意。「アガク」はメディアの一国と思われる。アマレクの王にアガグという王がいたが、かれはイスラエルの敵であり、サウル王に滅ぼされた(サムエル上15⁷, 33 参照)。おそらく著者はこの出来事を想起して、故意にイスラエルの敵ハマンを「アガク」と呼び、かれをサウルと同じくキシリの孫であるユダヤ人モルデカイと対照させたのであろう。

(2) ハマンは高官であったので、人々はかれの前でひざまずき、身をかがめた。これは東洋人、特にペルシア人の儀礼の仕方であつて、偶像崇拜とは違う。ユダヤ人もこのような仕方で高位の人々に尊敬を表わしていた(創23⁷, 29³³, サムエル上24⁸以下参照)。ユダヤ人モルデカイはハマンが自分の民の敵であるので、かれに対してもこのような尊敬のしるしを拒否した。しかし七十人訳は、この拒否の理由として宗教的なことをあげている(7d-17e)。

ハマンの昇進 く用いて昇進させ、ともにいるすべての大臣たちの上にその座を与えた。—それで王の門にいる侍臣たちはみな、ハマンの前にひざまずいて身をかがめた。王がそうすることを命じたからである。しかし、モルデカイはひざまずきもせず、身もかがめなかつた。—その時、王の門にいる侍臣たちはモルデカイに向かつて、「なぜ、あなたは王の命令にそむくのか」と言つた。—かれらが毎日モル

モルデカイ わつていた。—エステルはモルデカイが命じたように、その親族のことや民のことをだれにも知らせなかつた。エステルはモルデカイに養育されていた時と同じく、少しも変わらず、かれの命令を守つたからである。⁽¹⁴⁾ —モルデカイが王の門にすわつていたとき、王の居間の入口を守るふたりの侍従ビグタンとテレスとが怒りのあまり、アハシュエロス王を殺そうと計つていた。—この事がモルデカイの耳にはいつたので、かれは王妃エステルにこのことを告げた。それでエステルはモルデカイの名で王にそのことを告げた。—その事が調べられ、事実とわかつたので、ふたりは木に掛けられた。この事は王の前で記録の書に書きしされた。

さままざまの*処女たちが集められたとき、モルデカイは王の門にすわつていた。—エステルはモルデカイが命じたように、その親族の

ことや民のことをだれにも知らせなかつた。エステルはモルデカイに養育されていた時と同じく、少しも変わらず、かれの命令を守つたからである。⁽¹⁴⁾ —モルデカイが王の門にすわつていたとき、王の居間の入口を守るふたりの侍従ビグタンとテレスとが怒りのあまり、アハシュエロス王を殺そうと計つていた。—この事がモルデカイの耳にはいつたので、かれは王妃エステルにこのことを告げた。それでエステルはモルデカイの名で王にそのことを告げた。—その事が調べられ、事実とわかつたので、ふたりは木に掛けられた。この事は王の前で記録の書に書きしされた。

する民を「」と「」とく滅ぼそと計つた。⁽³⁾

アハシュエロス王の第十二年、第一の月、すなわちニサンの月に

ユダヤ人撲滅

ハマンの前で、日ごと、月ごとに、ブルすなわちくじを引き、ついに第十二の月、すなわちアダルの月にくじがあたつた。その時ハ

の 勅 令

マンはアハシュエロス王に言つた、「あなたの国の中のあらゆる民の間に分散し、ちりぢりになつてゐる一つの民がいます。その法律は他のすべての民のと異なり、かれらは王の法律も守りません。それでかれらをそのままにしておくことは、王のためになりません。もし王の御意にかなうならば、かれらを滅ぼす勅令をお書きください。そうすれば、わたしは王の金庫に納めるために、王の事をつかさどる人の手に銀一万タラント⁽⁵⁾を渡しましよう」。

そこで王は手から指輪をはずし、アガグ人ハンメダタの子でユダヤ人の敵であるハマンに渡した。「王はハマンに向かい、「その銀はおまえに与える。またその民もおまえに与える。またその民もおまえに与えるから、おまえが思うようにするがよい」と言つた。

第一の月の十三日に、王の書記官らが召し集められた⁽⁸⁾。かれらは王の総督、各州の知事、諸民のつかさに送るために、各州にはその州の文字で、おのおの民にはその民のこと

(3) 本節ではモルデカイの名が三回くり返されている。これはハマンがいかにモルデカイのために悩んでいるかを示すものである。

(4) アハシュエロス王の治世、第十二年は、エステルが王妃の位についてから五年目、ワシテが退位させられてから九年目であり、紀元前四七四年にあたる。くじは昔の人々の間によく行なわれたもので、ペルシア人もブルをひく習慣があった。「ブル」はアッカド語から出た語で、くじの意。ヘブライ語では「ゴラル」。ブルにはさいころや色のついた石または黒豆や白豆など、色々な物が用いられた。ヘブライ人は、占いをするのにエフオド(サムエル上23:12-12:30:7-8参照)や聖別されたトンミムとウリム(出28:30、申33:8参照)とを用いた。

(5) ヘロドトスによれば、ペルシア王国の歳費は、バビロニア貨で一万七千タラントであり、ハマンは約三分の一にあたる一万タラントを王の金庫に納めると言う(トビト1注11参照)。

(6) 昔は指輪に印が刻んであり、指輪を渡すことは署名することと同じであった。王がその指輪をハマンに渡したのは、ユダヤ人をハマンの自由に任せることを意味する。ファラオもヨセフに指輪を与えた(創41:42参照)。

(7) アハシュエロスがハマンにユダヤ人の虐殺を簡単に許したことは、昔にあつては珍しい事ではない。ペル

シアまたは他国歴史をひととく同様な事件が見られる。

(8) ユダヤ人虐殺に関するハマンの手紙を、各州の文字、諸民のことばで書くためには、多数の書記官が必要とした。タルグムによると、「悪人クセルクセスは、百二十七州から書記官百二十七名を召集した。各人は手に板と巻物を持ち、スサの門にすわった。かれらはユダヤ人とその律法に対するきびしい布告を書き送つた」と、書記官たちのことが興味深く述べられている。

(9) この手紙のあて先は、総督(二十一三十区)、州知事(百二十七州)、民のつかさの三つに分かれる。王国のこの制度は、ペルシアのダレイオス一世までさかのぼる。

(10) 王の勅令は具体的であり、明確である。またユダヤ人に対するこの勅令のきびしさは、そこに使用されていることばづかいによつてもよくわかる。

(11) ギリシア語訳では、王の勅令は次のように¹³節のうしろになつてゐる。^(8a-13節)ブルガタ訳では¹³⁻¹⁷に収められているが、その前に聖ヒエロニムスは次の注を施してゐる。「次にあるのは巻物の中に『かれらの財産または持ち物を奪い取つた』とある箇所^(3-13参照)に書きしるされ、通用本（七十人訳）にだけ見られる。なお聖ヒエロニムスはこの勅令の終わりに^(3-13g)「書状の写しはここまでである」と付け加えている。

(12) 「大王」の称号はペルシア王をさすために用いられた古代の表現。

(13) ハマンは自分の悪計の犠牲になるユダヤ民族、すなわち「ユダヤ人」という語を直接あげていない。かれが訴える極悪な罪とは、(一)人類に対する罪。ローマの古代史家タキトウスも、その年代記においてキリスト教徒に対し同様の非難をした。(二)他の民と融合しない罪。(三)王の法律を守らない罪。(四)国家に害を及ぼす罪である。

(14) この呼称は宰相に対する尊称であり、⁸⁻¹²ヨセフの伝記（創45章参照）にも出る。

れた。第十二の月、すなわちアダルの月の十三日を期して、その日のうちに、老いも若きも、女も子どもも区別なく、全ユダヤ人をことごとく滅ぼし、殺し、絶やし、そしてかれらの持ち物を奪い取れと命じた。⁽¹⁰⁾

次はこの書状の写しである。

書 状 の 写 し⁽¹¹⁾ 「アハシュエロス大王⁽¹²⁾はインドからエチオピアに至る百二十七州の各知事ならびにその下のつかさに対し、書を送る。

わたしは諸国民を統べ、全地を治めるようになつたが、みだりに権力を用いず、常に公平と寛容とをもつて治め、国民の平穏な生活を恒久的に保証し、また平和国家を築き、津々浦々までも道路を開き、すべての民が待望する平和が再びおとずれることを望んでいる。さて、わたしの顧問官たちに対し、この目的達成の方法を尋ねた時、われわれの間で、知恵に富み、不斷の善意をもち、不動の忠誠心を認められ、わが国で第二の位を与えたハマンは、われわれにこう指摘した。世界の諸国民の間に散在し、敵意をいだく一つの民がある。かれらはすべての他の民と相反する法律を有し、常に諸王のおきてを軽んじている。そのため、われわれが心から企てている国家統一は実現することができない。われわれが知つてゐることは、この民のみが常にすべての人々に反対し、われわれの政治をそこなう奇妙な法律に基づく生活をし、わ後、國家が完全な平和のうちに、支障なく営まれるためである」。

が國に悪影響を及ぼし、あらゆる害をなし、そのため、強固な國家の安寧が得られないことである。⁽¹³⁾ それゆえ、次のようにわれわれは命令する。國務をつかさどり、われわれの第二の父⁽¹⁴⁾であるハマンが、その書状のなかで示したすべての者は、妻子もろとも、いささかの慈悲もあわれみもなく、かれらの敵の剣で、本年第十二の月、すなわちアダルの月の十四日に、ことごとく打ち滅ぼされよ。久しく、かつ今なお敵意を有する者は、一日のうちに有無を言わせずよみのくにに突き落とされよ。これは今後、國家が完全な平和のうちに、支障なく営まれるためである」。

(1) イスマエル人は喜怒哀樂を外面にあらわす。悲しみをあらわすのに衣服を裂く習慣があった(創37²⁹、サムエル下11¹³₃₁参照)。現在でも、あるアラビアの女たちは帯のところまで衣服を裂く。荒衣をまとつたり、腰に巻いたり(サムエル下14²、詩35⁷₃₄¹³参照)、灰をかぶつたりすることも同じく悲しみをあらわす。荒衣についてはユディト4注13参照)。なお、その場合、頭髪とひげをそり、はだしになり(サムエル下15³⁰、イザヤ20²、エゼキエル24¹⁷、ミカ1⁸参照)、手をあげて天に向かつて祈つたり(ヨブ2¹²参照)、地に身を投げたり(サムエル下12¹⁶参照)するのが普通であった。

(2) 断食も悲しみのしである。断食はヘブライ人にとってはまれなことで、律法書によれば、あがないの日(レビ23²⁷参照)だけに行なわれた。歴史書や預言書は国家的悲しみの時に、すべての人々が断食したことを見ている。たとえば、サウル王の死の時(サムエル上31¹³)や、全国家の罪をあがなう時(エレミヤ14¹²、ヨエル1²₁₅参照)、断食を行なっている。バビロニア幽囚以後、断食はしだいに一般化され、儕いの行為または功德のあるわざとなつた。

この書状の写しを、各州に勅令として発布し、すべての民に公示し、当日のために準備させようとした。急使が王の命令によって直ちに出発した。この勅令はスサの城で発布された。時に王とハマンは座して酒盛りをしていたが、スサの町はあわてふためいた。

モルデカイ、エステルに救いを求める

モルデカイは、これらのことすべてを知った時、その着物を裂き、荒衣をまとい、灰をかぶり、町の中へ行き、大声で激しく泣き叫びつつ、「王の門前までたどりついた。しかし荒衣をまとつては、だれも王の門内にはいることはできなかつた。王の命令と勅令を受け取つた州ではどこでも、ユダヤ人の間にひじょうな悲しみ、断食⁽²⁾、すすり泣き、嘆きが起こり、荒衣と灰が、多くの者の寝床となつた。

(15) 勅令を発布したスサの城と、あわてふためいたスサの町とは別個(1注17参照)。なお、旧ラテン語訳は、

さてモルデカイは、これらの事をすべて知つた時、その着物を裂いて荒衣をまとい、灰をかぶり、町の中へ行き、大声で激しく泣き叫びつつ、「王の門前までたどりついた。しかし荒衣をまとつては、だれも王の門内にはいることはできなかつた。王の命令と勅令を受け取つた州ではどこでも、ユダヤ人の間にひじょうな悲しみ、断食⁽²⁾、すすり泣き、嘆きが起こり、荒衣と灰が、多くの者の寝床となつた。

エステルの侍女たちとかんがんたちが知らせに來たので、王妃はいたく悲しだ。彼女は荒衣を着替えさせようとしてモルデカイに着物を送つたが、かれは受けなかつた。そこでエステルは自分に仕えるように命ぜられた王のかんがんのひとりハタクを召し、モルデカイの所へつかわし、それは何事か、またなぜなのか尋ねに行かせた。「ハタクは王の門前にある町の広場にいるモルデカイの所に行つた。モルデカイは、自分に

起こったすべての事と、ハマンがユダヤ人殺害の賠償として王の金庫におさめる約束をした銀の正確な額とをかれに告げた。モルデカイはまた、スサで発布されたユダヤ人撲滅に関する勅令の写しをかれに渡し、これをエスティルに見せ、かつこれを説明し、彼女が王のもとへ行き、あわれみを請い、その民のため王に願い求めるように伝えさせた。¹⁵

⁽³⁾ また次のように言わせた、「あなたがまだ身分の低かったころ、わたしが自分の手であなたを育てたことを思い出してください。王に次ぐ者であるハマンが、わたしたちの死を王に願っています。あなたは主に祈り、またわたしたちを死から救ってくれるように王にとりなししてください」。

ハタクがもどってきてエスティルにモルデカイのことばを伝えると、¹⁰ エスティルはハタクにモルデカイへのことづけを与えて言つた、「召されないのに王の内庭にはいり、王のもとに行く者は、男女の別なくことごとく死刑に処せられるという法律があることを、すべての王の侍臣および王の諸州の民は知っています。ただし王がその者に金のしゃくをさし出せば生きることができます。しかしわたしはこの三十日間、王のもとに行くようにお召しを受けておりません」。

エスティルのことばがモルデカイに伝えられると、¹³ モルデカイはまたエスティルへの返事をことづけた、「あなたは王宮に住んでいるので、他のすべてのユダヤ人と異なり、

¹⁴ 難をのがれることができると思つてはなりません。『もし』あなたが、このような時に黙つているならば、他の所からユダヤ人のために助けと救いが起るでしょう。しかしあなたとあなたの父の家とは滅びてしまうでしょう。あなたがこの国の王妃にあげられたのは、⁽⁷⁾ このような時のためだったかもしれません」。

¹⁵ エスティルはモルデカイへの返事を与えて、言わせた、¹⁶ 「あなたは行って、スサにいるすべてのユダヤ人を集め、ともにわたしのために断食をしてください。三日間、雇も夜も飲み食いしてはなりません。わたしも侍女たちといっしょに断食をしましょう。そ

(3) ⁸節は七十人訳による。聖ヒエロニムスはブルガタ訳の中で(15²3)、これらの節の前に「以下もまた、わたしは通用本に書き加えられているのを見いだした、『かれ(モルデカイであることは疑ひない)は、彼女に、王のもとににはいって、その民のため、その祖国のために願うことを命じた』」とするしている。

(4) 本節の旧ラテン語訳は次のとおりである、「エスティルは兄の手紙を読むと、着物を裂き、苦しみと悩みの声を張り上げ、涙を流し、身も心も恐れに満ち、肉もひじょうに細った」。

(5) 「しゃく」は最初は普通のつえであったが、時代と国によって、その形は異なっている。昔から權威の象徴であり、国王のしるしである。ペルシア王は現存の石像に見られるように、つえ状で、さきが少し細くなっているしやくを右手に持っている。しゃくをさし出すことは恩恵のしるしである。

(6) ヘブライ語本は「他の所」といつて常に神を直接名さずのを避けている。後の律法学者たちは、この語「マコム」(「所」の意)を神の名と同格に用いている。

(7) イスラエル人は、神の摂理によって、人もまたその行為もすべて導かれているという強固な信仰を持つていた。したがってエスティルが王妃の位にあげられたことも、かれらの危機を救うためのものであると確信している。

して法律に反することですが、わたしは王の前に出ます。もし死ななければならぬのなら、死にます⁽⁸⁾。「そこでモルデカイは立ち去って、エステルが命じたすべてのことをした。

モルデカイの
祈り⁽⁹⁾

モルデカイは主のすべてのわざを思い出して祈つた。
「主よ、すべてをしろしめす王である主よ、
いつさいはあなたの力のうちにあります。
イスラエルを救うあなたの心には、

何人もはむかうことはできません。

あなたは造られました、天と地を、

また大空のものとのすべての驚くべきものを。

あなたはすべてのものの主であります。

主であるあなたに、逆うことはできません⁽¹¹⁾。

あなたはすべてを知つておられます⁽¹²⁾。

主よ、わたしがあの高慢なハマンの前で身をかがめなかつたのは、

横柄や高慢からではなく、また栄光を望んだからでもなかつたことを、
あなたは知つておられます。

わたしはイスラエルの救いのためなら、

かれの足の裏にさえいさぎよく接ぶんします⁽¹³⁾。

(8) ベルシアの歴史を見ると、これと同じような事件がある。ヘロドトスによれば、オタネスは、カンピセスの次に王位についたにせのスマルディスが、正統な王であるか否かを確かめるため、かれの後宮となつた自分の娘フェディメに、命をかけてかれの前に出るように命じた。そしてスマルディスが偽王であることを証明し、正統な王が位についた。

(9) 17^a節は七十人訳による。ブルガタ訳では13^b—14^c。聖ビロニムスはブルガタ訳の同章節の前に次のようく書いている、「以下の部分は『そこでモルデカイは立ち去つて、エステルがかれに命じたすべてのことをしてた』と書いてある箇所（4,17参照）の後に読まれる。しかしこれはヘブライ本にもまたどの訳本にも全然見られない」。

(10) このモルデカイの敬けんな美しい祈りと、次のエステルの祈りは、かれらの心の思いをあらわし、全体の出来事を劇的に叙述し、ギリシア悲劇と一脈相通じるものがある。この祈りは旧約聖書によく見られる表現を用い、神の名をたびたびくり返している。すなわち「キリヨス」（主）を七回、「テオス」（神）を三回、「バシレオス」（王）を二回、「アブラハムの神」を一回用いている。

(11) 出19^d、歴下20^e、ユдейト16^f参照。

(12) モルデカイはハマンに対する自分の行ないを説明し、かつ正当化するために神の全知に訴える。そして自分がハマンの前にひざまずいたらり、ひれ伏したりしなかつたのは、神の栄光にまさる栄光はなく、ただ神だけに栄光を帰するためであったと、神に告げる。

(13) 足のおもてや裏、あるいは足跡に接ぶんすることは、尊敬と服従のしるしである（イザヤ29^g, 詩72^h [71]

すべてのイスラエルの民は眼の前にせまる死を見て、必死に叫んだ。
エステルの祈り 王妃エステルもまた死の危険を身に感じ、主によりすがつた。
 彼女は美しい服をぬぎ、悩みと悲しみの服をまとい、高価な香油
 の代わりに灰とふんを頭にかぶり、身を大いに苦しめ、日ごろ好
 んで飾る部分を乱れ髪でおおい、イスラエルの主なる神に祈つて言つた、
 「ああ主よ、あなただけです、わたしたちの王は。
 わたしをお助けください。
 わたしは孤独で、あなたのほかにだれも助け手がいません。

9—山参照。

- (14) 前には創造主(17e節)に祈つたが、ここでイスラエルの民の救いを求めるので、太祖、特にアブラハムの神、すなわち契約の神であり(17f節)、救い主であり、解放者であるエジプト脱出時の神(17g節)に助けを求める。
 (15) 旧約聖書でしばしばくり返されている概念、すなわち生者のみが神を賛美することができ、死者はこのことができないことを示している(詩6:6-88〔87〕-13,15-17,18〔13-25〕、イザヤ38:18-20、シラ17:28参照)。
 (16) このような悩みの表わし方はイザヤ3:17-24、エレミヤ7:29、エゼキエル27:30、アモス8:10にもしるされてい
 る。

主なる神よ、アブラハムの神⁽¹⁴⁾である王よ、
 今、あなたの民を救つてください。
 敵はわたしたちを滅ぼそうとしてにらみ、
 あなたの初めからの遺産を破壊しようと望んでいます。
 あなたがご自分のためにエジプトの地から救い出したあなたの分け前を
 かろんじないでください。

主よ、わたしの祈りを聞き入れ、
 あなたの遺産をあわれみ、
 わたしたちの悲しみを喜びに変え、

(17) 多くの哀願の詩編（例えば88〔87〕）に見られるように、エステルは民の救いのため身を死にさらそうとしている。

(18) 昔から口伝えとなつてゐる過去の輝かしい歴史を思い出す（申6²⁰—25参照）。その歴史の根底をなすものはヤーウェがイスラエルの民を永遠の遺産として選ばれたこと、また太祖との契約をことごとく実現されたこと（申4³⁷—39、ヨシニア24¹⁶—18参照）である。本節で、旧ラテン語訳は次のようにもつと詳しくイスラエルに対する神のみ助けをたたえている。「主よ、わたしはあなたが洪水の時にノアをお助けになつたことを父祖たちの書の中で聞き知っています。主よ、わたしは、あなたが三百八人の男たちを持つアブラハムに九人の王をお渡しになつたことも、父祖たちの書の中で聞き知っています。主よ、わたしはあなたがヨナを大魚の腹からお救いになつたことも、父祖たちの書の中で聞き知っています。主よ、わたしはあなたがハナニヤとアザリヤとミシヤエルを熔鉢炉の中からお救いになつたことも、父祖たちの書の中で聞き知っています。主よ、わたしはあなたがダニエルをしのの穴から救い出されたことも、父祖たちの書の中で聞き知っています。主よ、わたしはあなたが、死に定められて命を祈るユダヤ人の王ヒゼキヤをあわれみ、かれに十五年の命をお与えになつたことも、父祖たちの書の中で聞き知っています。主よ、わたしはあなたが心をこめて祈り求めるアンナに男の子を生ませてくださつたことも、父祖たちの書の中で聞き知っています。主よ、わたしはあなたがご自分の気に入る者を、主よ、最後までお救いになることとも、父祖たちの書の中で聞き知っています」。

(19) 罪のうちで最も重い罪は、ヤーウェをして偶像に仕えることである。イスラエルの民が、神に対して罪を犯すとき、ヤーウェはその民をして、敵の手に渡す（士2¹¹—15、列下21¹¹—15参照）。神は正義によつてバビロニア幽囚と多くの災いとをイスラエル人にお与えになった。

(20) 異邦人の誓いは二つの目的をもつてゐる。一つはイスラエルの神とその宗教行為を絶滅すること（15節）であり、他の一つは自分の宗教を確立させること（16節）である。なお手をのばしたり、握手したり、手を打ち合つたりすることは、契約を結び保証を与えるしるしである（列下10¹⁵、マカバイ上6³⁸—11⁵⁰参照）。それで異邦人は偶像の協力と保護を願うために自分の手を偶像の手にのせて誓いを立て、または約束をする。

危険が身近に迫つています。

主よ、わたしは幼いころから家族や種族の間で聞き知つています、あなたがイスラエルをすべての民のうちから、またわたしたちの父らをそのすべての祖先のうちから、永遠の遺産として選び、約束どおりにかれらになされたことを。

今、わたしたちは、あなたの前に罪をおかし、敵の神々をたたえました。

それゆえ、あなたはわたしたちを奴隸として苦しめることにあきたらず、主よ、あなたは正しいです。

しかしかれらは、わたしを奴隸として苦しめることにあきたらず、自分の手を偶像の手に置いて、あなたのくちびるで定められたことを廃し、

あなたの遺産を滅ぼし、

- (21) 地上の神としてあがめられていたペルシア王をさす。
- (22) 神としての支配力または権力をさす。注⁵参照。
- (23) 普通は偶像（一コリント8⁴参照）をさすが、本節はむなしの神々を礼拝する異邦人、特にハマンをさしているようである。
- (24) エステルは同罪刑法による処罰を敵の上に求める（ユダイト9¹³参照）。これは旧約聖書によく見られる（詩55〔54〕¹⁰〔108〕²⁰参照）。
- (25) これはヤーウェに対する聖書の古代の呼びかけ。「神々の神」「主の主」「諸王の王」を思わせる（申10¹⁷、詩136〔135〕²、ダニエル2³⁷参照）。
- (26) アハシュエロス王をさす。王の怒りはしばしば、ライオンの怒りにたとえられる（格19¹²20²、二テモテ4¹⁷参照）。
- (27) モルデカイと同様に、エステルも神の全知に訴えて、自分は異邦人の王と結婚して王妃になつたが、心の

あなたをたたえる者の口を閉ざし、
あなたの家と祭壇との栄光を消し、
異邦人の口を開いてむなしの偶像をたたえさせ、
肉である王⁽²¹⁾を永久にあがめさせる」とを誓いました。

主よ、あなたのしやくを無に等しい者⁽²²⁾に与えず、
わたしたちの滅びをかれらにあざけらせず、
かえつてそのたぐみをもつてかれらに報い、
わたしたちにたくらみはじめた者を、
見せしめしてください。

主よ、わたしたちを思い起こし、

この悩みの時、あなたご自身を示してください。

わたしに勇気を与えてください。

すべての主權の統治者、神々の王⁽²⁵⁾よ。

ししの前でわたしのくちびるに美しいことばを与えて、

その心を変え、わたしたちに戦いをいどむ者を憎ませ、
かれと志を同じくする人々を滅ぼさせてください。

主よ、わたしたちをあなたの手をもつて救つてください。

わたしを助けてください。わたしは孤独で、

わたしにはあなたのほかにだれも助け手がいません。

あなたはすべての事を知り、わたしが悪人の榮えを憎み、
無割礼の者と、すべての異邦人の寝床をいみきらうことを知つておられます。⁽²⁷⁾

エステル、
王の前に出る

三日目にエスティルは王妃の服をまとつて王の広間が面している王宮の中庭にはいって立つた。王は宮殿の入口のほうを向いて、玉座にすわっていた。王は王妃エスティルが庭に立つているのを見て、彼女に恵みを示し、手に持つてある金のしゃくをエスティルにさしのべた。エスティルは近寄り、しゃくの先にふれた。

三日目に彼女は祈りを終え、祈りの服をぬぎ、晴れ着をまとつた。^{1a} そしてこの壯麗な装いで、すべてをみそなわすおん者であり、かつ救い主である神に助けを呼び求める人々が飲んだ（コリント8¹⁰参照）。

【注】（1）イスラエル人およびエスティルが行なつた断食の第三日目（4¹⁶参照）。（2）彼女が無断で内庭まで来たことは、すでに違法である（4¹¹参照）。（3）以下¹⁻²節までは七十人訳による。ブルガタ訳は15¹⁻¹⁹。聖ヒエロニムスはブルガタ訳15¹の前に「以下もまたわたしはこれを通用本に見いだした」とするし、さらに同⁴節の前にも「以下にあるのもまた同様である」と書いている。（4）断食をして祈るときに着る儂いの服（4¹⁷参照）。（5）神を「エポプテス」（みそなわすおん者）と「ソテル」（救い主）の二語で特徴づけている。エポプテスは

あなたはわたしの悩みを知つておられます。
わたしは人々の前に出る日に
頭にいただく高位のしるしをいみきらい、
またこれを月のもののようにいみきらい、
ひとりでいる日には、それをつけません。

あなたのはしためは、ハマンの食卓にすわったことも、
王の酒宴にあずかったことも、
奉納のぶどう酒⁽²⁹⁾を飲んだこともありません。
アブラハムの神である主よ、

あなたのはしためは、ここに連れてこられた日から今まで、
あなたにおいてのほか、なんの喜びも見いだしません。

すべてにまさつて力ある神よ、
望みなき者の声を聞き、

悪を行なう者の手からわたしたちを救つてください。
またわたしを恐れから救つてください」。

し、臣下たちはみな彼女を力づけた。

かれはその金のしゃくを取つて、彼女の首に当て、彼女を抱いて⁽⁹⁾、「さあ話しなさい」と言つた。彼女は言つた、「主よ、わたしは神の使いのようなあなたを見、あなたの威光に恐れ、心がおののいてしまいました。主よ、あなたはすばらしく、お顔は慈愛に満ちています」。彼女は語つている間に気を失つて倒れた。それで王は心配

めた後、ふたりの侍女を伴い、そのひとりになよやかに寄りかかり、他のひとりには、そのすそをささげ持たせて従わせた。彼女はすばらしい美しさに輝き、その顔は愛らしく幸福そうに見えた。しかしその心は恐れにもだえていた。彼女はすべての戸口をつぎつぎ通り王の前に出た。かれは玉座にすわり、黄金と宝石にきらめくいかめしい正装の王服をまとい、ひじょうに恐ろしく見えた。

かれは威光に輝く顔をあげ⁽⁶⁾、怒りに満ちた目で彼女を見つめた。そこで王妃はよろめき、青ざめ、氣を失い、その前をあゆむ侍女の頭の上に身をかがめた。⁽⁷⁾ その時、神は王の心を変えて穏やかにした。かれは驚き、玉座からとびおりて、彼女が意識を取りもどすまで彼女を腕に抱きかかえていた。そして優しいことばで慰めて言つた、「エスティルよ、どうしたのか。わたしはあなたの兄である。しっかりしなさい。あなたは死ぬことはない。われわれの法律は一般の民に適用されるものである。近寄りなさい」。

王は彼女に言つた、「王妃エスティルよ、なにか。あなたの望みはなにか、国の半ばでもあなたに与えよう」。エスティルは言つた、「もし王がよしとされるならば、きょうわたらしが王のために設けた酒宴に、ハマンといつしょにお出ましください」。王は言つた、「エスティルの望みをみたすように、ハマンを急いで連れてこい」。そこで王とハマンはエスティルの設けた酒宴に臨んだ。王は酒宴の席で、エスティルに言つた、「あなたの願

古代ギリシアのエレウシス祭典の用語にも見られる。ソテルは、たとえばアトレイマイオス八世をソテル二世と呼んでいるよう、王たちや統治者の尊称にも用いられた。

(6) ヘロドトスによれば、アハシュエロス王の威儀は、ことわざになるくらい恐ろしかった。古代ペルシア人は王を神のように敬つた。

(7) これは、この場面におけるクライマックスである。神は王の心を変えて（格21-参照）、エスティルとイスラエルの民をハマンの悪計から救う。

(8) 愛情と保護を示すことば（トビト7-以下、雅8-参照）。

(9) ヘブライ語本（2節）には、エスティルが「しゃくの先にふれた」とある。

(10) 聖書にしばしば見られる表現（サムエル上29⁹、同下14¹⁷20、ガラテヤ4¹⁴参照）。

(11) 親切と寛大さを表わす誇張的な表現（5⁶7²、マルコ6²³参照）。

(12) エスティルはユダヤ人の救いを即座に求めず、王を酒宴に招く。第一の酒宴のときには（5⁷8参照）、自分の願いを言い表わさないで、第二の酒宴でこれを明らかにする（7³）。著者はハマンの没落とモルデカイの勝利を、もっと劇的かつ感銘的に描くために単に文学的手法を用いてエスティルの願いを延ばさせていくように思われる。

朝、王に申し上げて、モルデカイをその上にかけるようにしなさい。そして王とともに楽しく酒宴にあずかってください」。ハマンはこの進言が気に入り、木を立てさせた。

6
1
2
モルデカイの栄誉　　その夜、王は眠れなかつたので、日々の事をしるした記録の書を持つてこさせ、これを自分の前で読ませた。するとその中に、王

3
とが書いてあつた。『王が「このために、モルデカイに、どんな栄誉と高い位とが与え

(13) ハマンには十人の子があつた(9¹⁰)。イスラエル人は多くの子孫のあることを誇りとしていたが、ペルシア人もまた同様であった。

(14) 著者はハマンがはやがつてんして誇っているのを皮肉つていて、エステルの気にいって二回も招かれたと思つてゐるが、実は恨まれ、滅ぼされようとしている。

(15) 「アンマ」は原始的尺度(創6¹⁵とその注参照)で、ひじから中指の先端までの長さ。約四十五センチ。ラテン語で「クビト」。五十アンマ、すなわち約二十三メートルに及ぶはりつけの木とは、誇張した表現で(1⁴—8²—12³—12¹²参照)、ハマンの怒りを象徴しているかのようである。

【注】(1) ヘブライ語本はどうして王が眠れなかつたか、その理由をはつきり述べていないが、七十人訳は「主が王から睡眠を奪つたので」としるして、神にその原因を帰してゐる。

(2) 2²³ 10² 参照。この書類が現存していれば、貴重なものであるが、おそらくアレキサンドロス大王がペルシアを占領した時に失われたものようである。

(3) ヘブライ語では「ビグタナ」。2²¹と符合させた。

いはなにか。必ず聞きいれてやろう。あなたの望みはなにか。國の半ばでも与えよう』
7 エステルは答えて言つた、「わたしの願い、わたしの望みは、これです。もし王の前に恵みを受け、王がわたしの願いをお聞きいれになり、わたしの望みをみたすのをよしとされますならば、あす催します酒宴に、またハマンとごいっしょにお出ましください。わたしはあす王のおことばに従つて申しあげましょう」。

その日、ハマンは喜びと楽しみに満ちた心で退出した。しかしハ

ハマン、モルデ

きもしないのを見て、モルデカイに対し怒りに満ちた。しかしハ

カイの死を
はかる

マンは怒りを抑えて家にもどり、使いを出して友だちと妻のゼレシ

を呼び寄せた。ハマンは、そのかがやかしい富と、多くの子宝に恵まれていること⁽¹³⁾、また王が自分を重く用い、王の大臣と侍臣たちにまさつて自分を昇進させたことを、すべてかれらに語つた。ハマンは続けて言つた、「王妃エステルもまた自分が設けた酒宴に王とともにあずかることをわたしだけにゆるし、ほかにはだれもゆるさなかつた。あすもまたわたしは彼女に王といつしょに招かれてい⁽¹⁴⁾る。しかし王の門にユダヤ人モルデカイがすわつてているのを見る間は、これらのことも喜ばしくない」。それで妻ゼレシと友だちはみなかれに言つた、「高さ五十アンマの木を立てて、あくる

られたか」と言うと、王に仕える近習たちは、「何も与えられていません」と答えた。

「だれか、内庭にいるのは」と王がたずねた。この時、ちょうど、ハマンはモルデカイのために立てた木にかれをかけることを王に願おうと、王宮の向こう側の内庭にはいつてきたところであった。「近習たちが王に、「ハマンが庭に立っています」と言うと、王は、「ここへ通せ」と言った。ハマンがはいってみると、王はかれに言つた、「王が榮譽を与えようと欲する者に対しては何をすればよいか」。ハマンは心の中で言つた、「王はわたし以外に、だれに榮譽を与えようと欲しているのであらうか」。「そこでハマンは王に言つた、「王が榮譽を与えようと欲する者に対しては、王の召した服を持ってこさせ、また王の乗られた馬の頭に王冠をいただきせて、それをひいてこさせ、その服と馬とを王の最も高い位の大臣のひとりの手にわたし、王が榮譽を与えようと欲する者に、その服を着させ、その馬に乗せて町の広場をとおり、その者の前で、『王が榮譽を与えるようと欲する者のためには、このように行なわれる』と宣言させるとよいでしょう」。王はハマンに言つた、「急いでその服を取り、馬を引いて、王の門にすわっているユダヤ人モルデカイに、おまえの言つたようにせよ。おまえが言つたことを、何一つ欠いてはならない」。そこでハマンは服を取り、馬を引いて、モルデカイに服を着せ、馬に乗せて町の広場を通り、かれの前で、「王が榮譽を与えようと欲する者に対しては、

このように行なわれる」と大声で宣言した。

12 それからモルデカイは王の門に帰ってきた。しかしハマンは悲しんで頭をおおい、急
13 いで家にもどった。ハマンはすべて自分の身に起こった事を妻ゼレシと友だちに告げ
た。するとその知者たちと妻ゼレシはかれに言つた、「あなたはモルデカイに敗れはじめた。もしかれがユダヤ人の子孫であるならば、あなたはかれに勝つことはできない。

(4) ペルシアの王たちは、王や国家に利益や善業をつくした者に対する恩賞を与える、その功労をねぎらうのがつねであった。ヘロドトスによれば(Ⅲ85)、ペルシア人には「王の恩人」(オロサンガイ)と名づけられた特別な階級があった。七十人訳⁽¹⁾には、王はモルデカイにすでに「報いを与えた」としるされている。

(5) 記録の書を読むことは、おそらく夜明けにまで及んだのである。ちょうど王がモルデカイの記事を聞き、かれに対する報酬について考へてゐる時に、ハマンが早朝、王のもとに来た。

(6) この表現は、しばしばくり返されていて(6,9,11参照)、文学的にも美しい。モルデカイに与える榮譽を決める人は、総理大臣であるハマンであった。かれはモルデカイを木に掛ける許可を王から得ようとして來たが、その願いを申出るといとまさえなかつた。

(7) アッシャーの浮き彫りには、王の馬が頭上に飾りのようなターバンを巻いているのが見られる。おそらくこれはペルシアの習慣であつたろう。

(8) 著者は太祖ヨセフ(創41³⁸—44参照)の昇進についての記事を思い出してこれを書きしるしたものと思われる(列上1³³、ダニエル5²⁹参照)。

(9) 王の命令は、ハマンの希望を全くくつがえし、この場面はクライマックスに達する。これは文学的にも美しい描写である。

(10) ヘブライ人やペルシア人が悲しみと悩みを示す動作である(サムエル下15³⁹、エレミヤ14⁴参照)。

(11) ハマンは総理大臣として、王と同様に歴史や法律に明るい知者たちを持っていた(1注27参照)。

必ずかれに敗れるでしょう。

6,14

ハマンの死刑

王とハマンは王妃エステルの酒宴に臨んだ。² この二日目の酒宴

の時、王は再びエステルに言つた、「王妃エステルよ、あなたの願いはなにか、必ず聞きいれてやろう。あなたの望みはなにか、國の半ばでも与えよう」。王妃エステルは答えて言つた、「王よ、もしわたしがあなたの前に恵みを受け、またもし王がよしとされま

すならば、わたしの願いはわたしの命を、またわたしの望みはわたしの民を、わたしに与えてくださることです。¹ わたしたちは、わたしもわたしの民も売り渡されて滅ぼされ、殺され、絶やされようとしています。もしわたしたちが男も女も、奴隸として売られるだけならば、わたしは黙っていたでしょう。しかし敵は王が受ける損失を償うことはできないでしよう²」。

その時、アハシュエロス王は王妃エステルに問うて、「その者はだれか、どこにいるのか、そのようなことを心の中でたくらんでいるやつは」と言つた。³ するとエステルは、「ここにいる悪いハマンこそ、あだであり、敵です」と言つた。ハマンは王と王妃の前に恐れおののいた。⁴ 王はひじょうに怒り、酒宴の席を立ち、宮殿の園に行つた。

222

223

エステル書

7,9

【注】(1) この第二日目の酒宴でも、王は第一日目と同じことばで王妃エステルにやさしく彼女の願いを尋ねる(^{5,9} 参照)。エステルは今度は明らかにその願いを表明し、王の勅令によって滅ぼされようとしているユダヤ人と自分の救いを求める。

(2) 本書中、最も難解な句の一つで、多くの異なった解釈と説明がある。これはおそらく原典の脱落によるものである。まだ適当な批判的訂正がない。本句を本節の後半に結びつけて、「なぜなら、わたしたちの災いは、王の損失とはくらべものになりません」と訳すこともできる。しかし本訳のように、本節全体にかけて、ユダヤ人の死滅は「國中の富と重要な労働力を失う結果となり、敵ハマンが王に約束した銀一万タラント(3注⁵)では、それを補償することができないからである」と解するほうがよいと思う。

(3) エステルは、ひじょうに劇的に、王の質問に答えて、そこにいたハマンこそユダヤ人の敵であることを告げる(^{3,10,8-1,9,10,24} 参照)。

(4) 王が宮殿の園を行つた理由は、タルグムⅡによると、木を切り倒して自分の怒りをしずめるためであり、他の注釈者によると、ハマンを避け、冷静に処置しようとしたためである。しかしながらむしろ著者は次節の場面を開拓するために王の行動を書いたものと思われる。

(5) 長上に対し懇願するとき、その足ともにひれ伏すことは普通である(^{8,3}、サムエル上^{25,24}、列下^{4,27} 参照)。

(6) 死刑囚の顔をおおうことは、ギリシアとローマの習慣であったが、ペルシアにも同様の習慣があつたもの

なおもかれらがハマンと語り合つてゐると、王の侍従たちが来

りかかるうとする災いを見ていることができましようか。またどうしてわたしの同族が滅びるのを見るに忍びえましょうか」。

(7) この王は衝動的で側近者のすすめにたやすく影響される(2注³参照)。

(8) ハマンの死刑は同罪刑法に基づいたものであり、因果応報の通例である。このように、被圧迫者が解放され、圧迫者が滅びる事件は、しばしば教訓書に見られる課題である(伝¹⁰、詩⁷₁₆³⁵〔³⁴〕⁸、格¹¹₈²⁶₂₇²⁸₁₀、マタイ⁷₂、マルコ⁴₂₄、ルカ⁶₂₈参照)。

【注】(1) 家は全財産を意味する(創³⁹₄⁴⁴、列上¹³₈参照)。タルグム丁は、説明として「その家人、すべての宝と富」という句を加えている。罪人の財産は国家に没収されるのが普通であるが、王はハマンの財産をエステルに与えた。

(2) 王の麗顔を挙げることのできる高い位にあげられたという意(1₁₀¹⁴参照)。

(3) 指輪を与えることは、総理大臣に任命することを意味する(3₁₀~15参照)。モルデカイは王から指輪を受け、ハマンが有していたすべての権威を受けつぐ。

(4) エステルは王の気に入るために、修辞的な表現を用いる。本節では四つの儀礼的、前口上的な句が出る。前の二つはすでに1₁₀⁵₄⁸7₃で用いられたものであり、後の二つは初めて出る。

(5) 王の前に出て、王のことばを賜わっているのは、実はエステルひとりだけで、「ユダヤ人モルデカイ」は、おそらく後代の書き入れであろう。七十人訳には、「ユダヤ人モルデカイ」はない。

は言った、「好都合にも、王のためによいことを告げたあのモルデカイのためにハマンが造った高さ五十アンマの木があります。それはハマンの家に立っています」。すると王は、「ハマンをそれにかけよ」と言った。人々はハマンをかれがモルデカイのために用意した木にかけた。⁽⁸⁾こうして王の怒りは解けた。

その日、アハシュエロス王はユダヤ人の敵ハマンの家⁽¹⁾を王妃エス

イスラエル人、テルに与えた。モルデカイは王の前に出た。⁽²⁾エステルが自分とかれ

王の恩恵を受くとの関係を王に告げたからである。「その時、王はハマンから取り

もどした自分の指輪をはずしてモルデカイに与えた。エステルはモルデカイにハマンの家を管理させた。

エステルは再び王に言った。彼女はかれの足もとにひれ伏し、アガグ人ハマンの悪い計略、およびかれがユダヤ人に對してたくらんでいた陰謀を取り除くことを涙ながらに嘆願した。「王がエステルに金のしゃくをさしのべたので、エステルは身をおこし、王の前に立ち、「そして言った、「もし王がよしとされ、わたしが王の前に恵みを受け、またこの事が王の前に正しいとみえ、かつ、もしわたしが王の目にかないますならば、ハンメダタの子アガグ人ハマンが、王の全州にいるユダヤ人を絶やそうとたくらんで書き

。送った書を取り消す命令を書かせてください。」どうしてわたしはわたしの民の上に降

どおりに書きしるし、王の指輪でそれに印を押すがよい。王の名において書き、王の指輪で印を押した書は、だれもこれを取り消すことができない。⁽⁶⁾ その時、王の書記官らが召集された。これは第三の月すなわちシワンの月の二十三日であった。そしてかれらはモルデカイがユダヤ人について命じた事を、各州にはその州の文字で、おのおのの民にはその民のことばで、ユダヤ人にはその文字ことばを用いて、インドからエチオピアに及ぶ百二十七州の総督、全州の知事およびつかさたちにあてて書き送った。⁽⁷⁾ の書状はアハシュエロス王の名において書かれ、その指輪で印が押され、宮廷の養馬場の王の用馬である良種の馬に乗る急使によつて送られた。⁽⁸⁾ それをもつて、王はすべての町にいるユダヤ人がともに集まり、その生命を守り、自分たちを襲おうとするすべての民族、すべての州の武装した民を、女、子どもとともに滅ぼし、殺し、絶やし、その持ち物を分どり品として奪うことを許した。⁽⁹⁾ そしてアハシュエロス王は、その諸州において、第十二の月すなわちアダルの月の十三日を期して、一日のうちにその事を行なうように定めた。

^{12e} 書状の写しは次のとおりである。⁽¹¹⁾ 「アハシュエロス大王は、^{12b} インドからエチオピアに及ぶ百二十七州の各総督、および知事たちならびにわれわれの国家に忠実な民にあいさつをする。

ユダヤ人の復権⁽¹⁰⁾

多くの者は、その恩人の多大な恩恵によつて名誉を受ければ受けるほど、ますます

(6) 王の勅令は取消不可能であるから(→¹⁹ 参照)、王は他の勅令をもつてユダヤ人の救いを計る。ブルガタ訳には「王の名によつて送られ、その指輪で印をした手紙に、あえてなんびとも反対してはならない。」これは慣例であつた」とある。

(7) 七十人訳には「この第一の月、すなわちニサンの二十二日」とある。本節はヘブライ語の教訓書中、最も長い節で四十三語、百九十二字ある。

(8) 本句は古代の聖書学者にとって難解なものであった。ラビたちの書きしるした「タルムード」の学者も、「われわれはこれを理解しえなくとも、エスティル書を讀んでいた。であるから、他のイスラエル人も、たとえヘブライ語を知らなくても本書を読むべきではないか」(メギラ^{18a})と書いている。ブルガタ訳は、「この書状を急使に託して送つたが、かれらは諸州を走りめぐり、新しい音信を伝えて前の書状を防ぎとめた」と訳している。

(9) 異邦人と生活をともにする離散のユダヤ人を対象にして書かれた七十人訳は、「滅ぼし、殺し、絶やし」といつたひどいことばを使ひを避けて次のようにしるしている。「それによつて、王はユダヤ人たちがすべての町において自分たちのときてに従い、みずからを守り、また敵と反対者に対して望みのままに行なうように命じた」。

(10) ^{12a}~^{12b}節は七十人訳による。ブルガタ訳は16~24。聖ヒエロニムスはブルガタ訳16の前に「アルタクセルクセス王が、その国の諸州にいるユダヤ人のために送つた書状の写し。これもまたヘブライ語の書物にはない」としるしている。この書状は深い哲学的考え方をもつてハマンの事件を説明し、またモルデカイと王妃エステル、およびユダヤ人の解放と復権について述べる長文の書状である。

(11) この書状は3^{19a}~3^{19b}と同じ表現を用いている。外典のマカバイ第三書7~9にしるされているアトレイオスの書状はアハシュエロスのこの書状を見本として書かれたものと思われる。しかしその文体はこれよりも莊重ではない。

(12) ギリシア語でエウエルゲテス。王たち(たとえアハシュエロス三世、エウエルゲテス、246~221B.C.)も統治者たちも、この称号で呼ばれた。

12r 12q 12p

12n 12o 12p

もかかわらず、かれはその高慢心を押さえきれず、われわれの統治権とわれわれの生

命とを奪おうとたくらんだ。——かれは、われわれの恩恵にはるかに価しないものであつたが——客
らない恩人であるモルデカイばかりでなく、われわれの國をともになら罪なきエス
テルと、そのすべての民を、多くの巧妙な陰謀をもつて滅ぼそうと計つた。——このよ
うにして、かれはわれわれを孤立させ、われわれの國をペルシア人の手からマケドニ
ア人の手に移そうと考えた。

しかし、この極悪人が全滅を計つたユダヤ人は、全くわる者ではなく、かえつて最
も正しい法律によつて生活し、——われわれと先祖のために、最もすぐれた秩序をもつ
て國家を治めた最も高く、最も強い生ける神の子らであることがわかつた。⁽¹⁷⁾ したがつ

(13) ハマンのたぐらみによつて罪のないユダヤ人の血が流されること。

(14) 直訳では「足もとにある」すなわち目前にあること。

(15) 現在のギリシア語原文では「マケドニア人」であるが、おそらく「メディア人」と読むほうが正しい。なぜなら史実から見て、ペルシア人とメディア人の間に行なわれた政治支配権の争いを暗にさしてゐるからである。⁽¹⁶⁾ 節も同様。

(16) ハマンは「われわれの父」と呼ばれ、「王に次ぐ者」となり、人々の尊敬を受けるという特別な榮誉があ
ずかった。^(3-2-5-13参照)

(17) アハシュエロスのことばは、イスラエルの神に対するかれの信仰と感謝の表明のようである(エズラ
1-2、外典のマカベイ第三書7-6-22)。異教徒アハシュエロスがイスラエルの神に対してもこのような深い信仰を持
つていたということは、當時ペルシアに広く伝わっていたゾロアスター教に思いをいたせば、奇異なことではない。

高慢になり、われわれの國民に害を加えようと計るばかりでなく、その榮譽をになうこと
ができるはず、かえつてその恩人にさえ、陰謀を企てようとしている。——かつ、かれ
らは人々の心から感謝の念を奪うばかりでなく、善を知らない人々のほめことばで自
ら高ぶり、常に万事をみそなわし惡を憎む神の正義からのがれうると思つて
いる。またしばしば、公務に携わる友の甘言が、權威の座にあつた多くの人々をそそのかし
て、かれらに罪のない血の責めの半ばを負わせ⁽¹³⁾、かつ、かれらに取り返しのつかない
災害をこうむらした。——かれらはまた偽りと欺きの心をもつて為政者の誠実な善意を
まどわした。——われわれが述べることは、古い歴史をひもとかなくとも、不當に權力を
与えられた惡者どもが近ごろ行なつた惡業を見れば、おのずから明らかとなるである
う。——われわれはこれから、全國民のために、國家の安寧と平和とを図るように心を
くばらなければならない。——われわれは方針を改め、目の前に提出される事柄を常に
いつそう公正にさばくべきである。

マケドニア人であるハンメダタの子ハマンは、——實際にはかれはペルシア人の血
を引かない異國民であり、われわれの恩恵にはるかに価しないものであつたが——客
人として待遇され、——またわれわれが諸國民に示す博愛心にあざかり、われわれの父
と呼ばれ、すべての人々から王に次ぐ者として、常に尊敬を受けたほどである。⁽¹⁶⁾ 一に

ことができず、かえつてその恩人にさえ、陰謀を企てようとしている。——かつ、かれ
らは人々の心から感謝の念を奪うばかりでなく、善を知らない人々のほめことばで自
ら高ぶり、常に万事をみそなわし惡を憎む神の正義からのがれうると思つて
いる。またしばしば、公務に携わる友の甘言が、權威の座にあつた多くの人々をそそのかし
て、かれらに罪のない血の責めの半ばを負わせ⁽¹³⁾、かつ、かれらに取り返しのつかない
災害をこうむらした。——かれらはまた偽りと欺きの心をもつて為政者の誠実な善意を
まどわした。——われわれが述べることは、古い歴史をひもとかなくとも、不當に權力を
与えられた惡者どもが近ごろ行なつた惡業を見れば、おのずから明らかとなるである
う。——われわれはこれから、全國民のために、國家の安寧と平和とを図るために心を
くばらなければならない。——われわれは方針を改め、目の前に提出される事柄を常に
いつそう公正にさばくべきである。

14 に復しゅうするその日のために備えるようになつた。『そこで王のご用馬である良種の馬に乗つた急使は、王の命令によつてせき立てられ、直ちに出発した。この勅令はスサの城で出された。

15 モルデカイは青と白の朝服をまとい、大きな金の冠をいただき、良質のリンネルと真紅の織物でできたマントをまとい、⁽¹⁹⁾ 王の前から退出した。スサの町は喜びの声にあふれた。⁽²⁰⁾ ユダヤ人は光と喜びと楽しみと誉れがもたらされた。⁽²¹⁾ いずれの州、いずれの町

16 この宗教の開祖は、アハシュエロスの約六百年前に生存したゾロアスターである。はじめは一神教であったが、しだいに二神教になり、善神であるアフラマズダまたはオルムズドと、悪神であるアヘリマンを信奉するにいたつた。石に刻まれた碑文によると、ペルシアの王たちはたとえばダレイオス一世のごとく、だいたい最高の神として、善神のみを認めていた。そしてかれらは、異国の神々の門に入り、その守護を願つても、感謝は常に善神アフラマズダにささげた。ペルセポリスの碑文によると、アハシュエロス（クセルクセス）は、「わたしがなしたすべてのことは、アフラマズダの旨によるものである。アフラマズダは、このわざを成し遂げるために、助けを与えた」と書き残している。

（18）完全な滅亡を示すための表現（エレミヤ^{9:10}₁₂⁴、エゼキエル^{14:13}）。

（19）ペルシア人は、ヘロドトスによると、色のついた幅の広い衣服を好んだ。モルデカイの冠（ヘブライ語でアテレト）は、王の冠（ヘブライ語でケテル）と異なる。

（20）ハマンが出した勅令（3:15）で町は悩みに沈んでいたが、今度はモルデカイが出した勅令で喜びにあふれた。著者はユダヤ人の喜びの感情を、ペルシア人全体にも及ぼしている。

（21）喜びの表現。この表現はしばしば出る（ヨブ^{22:30}₂₆、詩^{97:96}、格^{13:9}）。プリムの祭日にエステル書を会堂で読む時は、いままでの光を用いる習慣が現在も残っている。

12x 12u 12t 12s
13 ヨダヤ人諸子は、この日を自分たちの記念すべき祭日の中に加え、盛んな祝宴を張つて祝え。この日は現在も将来も、われわれと、また忠誠なペルシア人にとっては、救いの日であり、われわれに対して陰謀をたくらむ者どもにとっては、滅びの思い出となるであろう。

14 これらの事を守らないすべての町や国はことごとく、容赦なくやりと火で滅ぼされ、人も通れないようになるばかりでなく、永久に野の獣や鳥にも最もいまわしい所となる。⁽¹⁸⁾

15 この書状の写しは勅令として全州に伝えられ、すべての民に公示され、ユダヤ人は敵

16 て諸子が、ハンメダタの子ハマンが送った書状を実行に移さないのはよいことである。なぜなら、これらの事をなした者とその家族は、ことごとくスサの門で木にかけられたからである。すべてをしろしめす神は、かれの行ないに応じて、すみやかにかれを罰された。『それゆえ、この書状の写しを各所に公示し、ユダヤ人をして、かれら自身の法律に従つて生活させよ。諸子は、かれらを助けて、かれらが受難の時と決められたその日、すなわち第十二の月アダルの十三日に、自分たちを襲う者どもから身を守ることができるようさせよ。』すべてを治める神は、選ばれた民にとつて滅びの日となつていたこの日を喜びの日に変えられた。

でも王の命令と勅令が伝えられた所では、ユダヤ人の間に喜びと楽しみがもたらされ、かれらは酒宴を開き、この日を休日とした。そしてこの国に住むもろもろの民の中から多くの者がユダヤ人となつた。これはユダヤ人に対する恐れがかれらを襲つたからである。

イスラエル人、
敵を撃つ

されると、ユダヤ人は、自分に害を及ぼそうとする者に手をくだすために、アハシニエロス王の全州のユダヤ人の町々に集まつた。しかしがらに敵対できる者はだれもいなかつた。これはユダヤ人に対する恐れがすべての民を襲つたからである。全州のすべてのつかさ、総督、知事および王の役人は、こぞつてユダヤ人を助けた。これはモルデカイに対する恐れがかれらを襲つたからである。

モルデカイは王宮で大いなる者となり、その名声は全州にひろがつた。これはこのモルデカイという人が、ますます権力を持つようになつたからである。⁽²⁾

ユダヤ人たちは、すべての敵を剣で撃ち、かれらを殺し、かつ絶やし、自分を憎む者に対し思いのままにした。⁽³⁾ ユダヤ人たちはスサの城で五百人を打ち殺した。またハ

ルシャンダタ、ダルポン、アスペタ、一ポラタ、アダリヤ、アリダタ、パルマシタ、アリサイ、アリダイ、ワエザタ、一すなわちハンメダタの子でユダヤ人の敵であるハマンの十人の子らをも殺した。しかしかれらはその持ち物には手を触れず分どらなかつた。⁽⁵⁾

その日、スサの城で殺された者の数が王に報告されると、⁽¹²⁾ 王は王妃エステルに言つ

【注】(1) 第二の勅令発布後(89)、九か月が経過し、ユダヤ人の大勝利の前日となつた。第一の勅令によつて、異邦人によるユダヤ人の虐殺が決定されたが、第二の勅令によつて(811)、ユダヤ人が逆に異邦人を虐殺することになる。両勅令とも変更できない法律であるが、結果的には第二の勅令によるユダヤ人の勝利となる。タルグムIは、明らかにこの状態は、「天によつて」変化したとしているが、ヘブライ語本は神に關しては何もしないしていない。神がイスラエルのために歴史的事件に参与する場合、その事件の経過に変化が起つる。のろいは祝福に(申23⁶〔5〕)、祝いは悩みに(アモス8¹⁰)、悩みは喜びに(エレミヤ31¹³、詩30〔29〕¹²)変わる。

(2) 本節は10²の前ぶれである。

(3) 同罪刑法に基づいて報復することは古代社会の慣習であった(出21²³〔2〕、レビ24¹⁷〔2〕)。この律法は新約聖書で廢止される(マタイ5³⁹〔4〕)。本節は七十人訳ではない。

(4) ハマンの十人の子の名は七十人訳と異なる。かれらの名(7—節)は、アダリアを除いて、他はみなヘブライ的名である。ヘブライ語本には、十人の子の名がページの右方に右書きで垂直に書き並べられているが、これはユダヤ人の伝説によると、かれらが一本の木に上から下へかけられたその形を示したものである。

(5) これに反して七十人訳は本節の終わりに「かれらは分どりをした」と述べている。王の勅令では分どりが許されているが(811)、ユダヤ人が、分どり品に手を触れなかつたのは、その後しゆうが、ハマンのごとく金錢的なもの(3¹³参照)でなかつたことを教えるためであった。このことを著者は10¹⁵〔16〕節で強調している。ユディトの著者が、アッシリア人の陣営での分どりの状態を詳細にししているのと(ユディト15⁷〔11〕16⁹)、全く対照的である。

(6) ここに「あすもまた」と言ってエステルが、スサにいるユダヤ人たちのために敵を殺害する権を願つてゐるのは、おそらくスサが首都であったので、そこにはもっと多くのユダヤ人排斥主義者たちがおり、一日だけではじゅうぶんでなかつたためである。

(7) 第二の望みは、すでに殺された(アーロン)ハマンの子らを木にかけることである。みせしめのため、死体がさらされることは、まれではなかつた(サムエル上³¹[10]、ユディト¹⁴[11]参照)。

(8) 七十人訳は「一万五千人」、ルキアノス校訂本は「一万余七人」。著者は古いユダヤ人の道徳観に基づいて、イスラエルの民に対して計画された悪業は必ずその計画者の上に報復されることを示す(4[7]、ゼカリヤ²[12][8][9]参照)。

(9) ¹⁹節はヘブライ語本にはないが、文脈を明らかにするため七十人訳によつて入れた。

(10) 9[20]—10[1]は、おそらくユダヤ史の中にある「ペルシアとメディアの諸王の記録の書」(10²参照)からの引用。この節句の表現は他の章句といくぶん異なるが、文体はほぼ統一されている。

(11) 友人間で食べ物を贈り合うことはユダヤ人にとってはまれなことであつたが(ネヘミヤ⁸[10]—12参照)、ペルシア人にとっては祝日には普通のことであつた。

た、「ユダヤ人たちはスサの城でさえ、五百人とハマンの十人の子らを打ち滅ぼしたのであるから、ましてその他の諸州では、どんなであつたろう。さあ、あなたの願いはなにか、聞きいれあげよう。さらにあなたの望みはなにか、みたしてあげよう。」エステルは答えた、「もし王がよしとされますならば、スサにいるユダヤ人たちが、あすもまた、きょうの勅令に従つて行なうことゆるし、またハマンの十人の子らを例の木にかけさせてください」。王がそうするように命じたので、スサにいるユダヤ人たちが、あすも十人の子らは木にかけられた。スサにいたユダヤ人たちは、アダルの月の十四日にも集まり、スサで三百人を殺した。しかし持ち物には手を触れず分どらなかつた。

王の全州にいる他のユダヤ人たちも集まり、自分たちの生命を守り、敵に勝つて平和を得、自分たちを憎むかれらを七万五千人殺した。しかしその持ち物には手を触れず分どらなかつた。これはアダルの月の十三日のことであつた。十四日には、かれらは休み、その日を喜びと酒宴の日とした。しかしスサにいるユダヤ人たちは、十三日と十四日に集まり、十五日に休み、その日を喜びと酒宴の日とした。それで、城壁のない町々なわち村々に住むユダヤ人は、アダルの月の十四日を喜びと酒宴と祝いの日とし、互いに食べ物を贈る日とした。

都会に住む人々もまた、アダルの十五日を喜びと祝いの日として守り、近所の人々に食べ物を贈つた。

プリム祭の制定⁽¹⁰⁾

モルデカイは、次のことを書き、アハシュエロス王の全州にいるすべてのユダヤ人に、遠くにいる者にも近くにいる者にも手紙を送り、アダルの月の十四日と、その同じ月の十五日を、毎年祝うことを命じた。すなわちこの両日を、ユダヤ人が敵に勝つて平和を得た日とし、この月を苦しみが喜びに、悲しみが祝いに変わつた月とし、またこれらの日を酒宴と喜びの日とし、互いに食べ物を贈り、貧しい者に施しをする日とするように命じた。

(6) ここに「あすもまた」と言ってエステルが、スサにいるユダヤ人たちのために敵を殺害する権を願つてゐるのは、おそらくスサが首都であったので、そこにはもっと多くのユダヤ人排斥主義者たちがおり、一日だけではじゅうぶんでなかつたためである。

(7) 第二の望みは、すでに殺された(アーロン)ハマンの子らを木にかけることである。みせしめのため、死体がさらされることは、まれではなかつた(サムエル上³¹[10]、ユディト¹⁴[11]参照)。

(8) 七十人訳は「一万五千人」、ルキアノス校訂本は「一万余七人」。著者は古いユダヤ人の道徳観に基づいて、イスラエルの民に対して計画された悪業は必ずその計画者の上に報復されることを示す(4[7]、ゼカリヤ²[12][8][9]参照)。

(9) ¹⁹節はヘブライ語本にはないが、文脈を明らかにするため七十人訳によつて入れた。

(10) 9[20]—10[1]は、おそらくユダヤ史の中にある「ペルシアとメディアの諸王の記録の書」(10²参照)からの引用。この節句の表現は他の章句といくぶん異なるが、文体はほぼ統一されている。

(11) 友人間で食べ物を贈り合うことはユダヤ人にとってはまれなことであつたが(ネヘミヤ⁸[10]—12参照)、ペルシア人にとっては祝日には普通のことであつた。

ユダヤ人はかれらがすでに行なつたように、またモルデカイがかれらに書き送つたよううにそうすることを約束した。一これは、全ユダヤ人の敵アガグ人ハンメダタの子ハマンは、ユダヤ人を絶やそと計り、フルすなわちくじを投げてかれらをかき乱し絶やそうとしたが、一王はエスティルが自分の前に来たとき、書をもつて、ハマンがユダヤ人に對してたくらんだ悪い計画をかれ自身の頭にありかからせ、かれとその子らを木にかけられよう命じたからである。一それでこの両日はフルにちなんでプリムと名づけられた。それゆえ、この手紙のことばと、またこの事について見たこと、および経験したことによつて、一ユダヤ人はその書かれているところに従い、また定められた時に従つて、自分たちと、その子孫、および自分たちにつながるものが、毎年この両日をまちがいなく守るように定め、一また代々、家々、諸州、町々においても、この両日を思い起こし、かつ守り、またプリムの両日を、ユダヤ人の間で中止せず、かつその記念が子孫の代までも絶えないよう決心した。

アビハイルの娘、王妃エスティルとモルデカイはプリムに関するこの第二の書を確認するためには權威をもつて筆を取つた。一それはアハシュエロスの国の百二十七州にいるすべてのユダヤ人に、平和と眞実のことばをもつて送られた。一これはユダヤ人モルデカイと王妃エスティルが、ユダヤ人に命じたように、またユダヤ人が自分たちとその子孫の

ために定めたように、プリムのこれらの日を、また断食と嘆きのことについても、定められた時に守らせるためであつた。一エスティルの命令は、プリムに関するこれらの事を規定し、書き物として残された。

(12) プリムはフルから出たヘブライ語の複数形(3注⁴参照)。

(13) 本書の史料(11節と解説172ページ参照)に従つて記述を続けるならば、当然モルデカイだけが本節とそれ以下の節の主語となるはずであるが、しかし著者はプリム祭の重要性にかんがみ、また本書の主人公がエスティルであるために、本章29節にモルデカイとともにエスティルの名を書き加え、またエスティルに関する32節を特に付け加えたものと思われる。これに対して、本節からは主役がモルデカイからエスティルに変わるものと解して、29節ではそこにしてあるモルデカイの名を後の書き入れとみなして削除し、31節では「王妃エスティル」を同様に省く者もある。ちなみに、本章29節の「エスティル」は原本には単数女性代名詞となつていて、エスティルの名はない。ヘブライ語の女性代名詞は中性代名詞も兼ねる。

(14) プリム祭に關しては、エスティル書の解説178—180ページ参照。この祭りは次のとおり行なう。すなはちアダルの十三日に、「エスティルの断食」を行ない、会堂に集まり、創世記27—34章を読み、貧者に施しをする。十四・十五日の両日は、夕方会堂において、たいまつのかげで、エスティル書を読み、ハマンの名を聞くと、みんな大声で「この名はのろわれよ」(格10)と手を打ち鳴らして叫び、かれをのろう。終わりにみな声をそろえて、「のろわれたハマン、祝福されたモルデカイ、のろわれたゼレシ、祝福されたエスティル、のろわれた異邦人、祝福されたイスラエルの子ら……」と叫ぶ。その時、ぶどう酒をのみ、「のろわれたハマン」と「祝福されたモルデカイ」の区別さえわからなくなるくらいであるといわれている。初めからプリム祭のこのような習慣があつたので、ヘブライ語本には神の名をいつさい避けている(解説172ページ参照)。なお、このプリム祭には、友人、師弟、富者と貧者の間に贈り物がなされる。

モルデカイ 権力と勢力によるすべての事業、および王がモルデカイを高い地位へ の 称 賛 に昇進させた詳しい話は、メディアとペルシアの諸王の記録の書に書かれているのではないか。

ユダヤ人モルデカイはアハシュエロス王の次に位する者、

ユダヤ人中の偉大な人物、

多くの兄弟たちに愛された者である。

かれはその民の幸福を求め、同族の平安に心をくだいた。⁽⁴⁾

モルデカイは言つた、「これらの事をなされたのは神である。⁽⁶⁾
 夢の実現⁽⁵⁾ わたしはこれら的事について見た夢を思い出すが、その一つもむなしくならなかつた。小さな泉が川となり、光りと太陽と多くの水とがあつた。川は王がめとつて王妃としたエステルである。二頭のりゅうはわたしとハマンである。「国々はユダヤ人の名を滅ぼすために同盟を結んだ人々である。わたしの民とは神に叫んで救われたイスラエルである。主はその民を救い、主はわたしをすべての悪から解き放ち、神は国々の間には決して起こらなかつた大きなしるしと不思議を行なわれた。」神はこのために二つのくじを定められたが、一つはそ

の民のために、一つはすべての国々のためであつた。⁽⁷⁾ このふたつのくじは、定められたさばきの時間、時、日に、すべての国々において、神の前で当つた。¹¹ その時、¹² 神はその民を顧み、その遺産であるかれらを義とされた。¹³ それでアダルの月、すなわちその月の十四日と十五日の両日は、神のみまえにおけるつどいと楽しみと喜びの

【注】(1) 直訳では「海の島々」。ペルシア王国の小アジアの半島とその周辺の島々、および東地中海の沿岸の国々、すなわちフェニキア、エジプトなどをさす。

(2) この記録の書はおそらく²³と⁶⁻¹の記録の書とは別であろう。ユダヤの歴代記には、メディアとペルシアの歴史も含まれているので、著者はこの歴代記から本書の⁹⁻²⁰と¹⁰⁻¹の部分を引用したものと思われる。

(3) 著者が、その史料を示すために用いるこのような表現は列上¹¹⁻¹⁴、¹⁹⁻²⁹、²⁵⁻²⁸、³²にも見られる。

(4) モルデカイは総理大臣になり、ペルシア王国の事実上の支配者となつた。タルグムI、IIには「かれはユダヤ人の宝、長老、全国民のかしらである。地のはてからはてまでかれには名誉が与えられ、服従がなされた。王たちはかれを恐れ、かれの前にいるときは、あたかも大王（アハシュエロスをさす）の前にいるようであるえた。

モルデカイ自身は、もろもろの星のうちで明星のようであり、夜明けのようであつた」と誇張してゐる。(5) ^{3a-3i}節は七十人訳による。ブルガタ訳は¹⁰⁻¹¹。聖ヒエロニムスはブルガタ訳にあたつてこの箇所の前に「ヘブライ語本にあることを、わたしは全く忠実に訳した。しかし以下の部分がギリシアの言語と文字とで収められ、通用本に書き載せられているのを見いだした。從来この章は本書の終わりに置かれていたが、わたしの用法に従つて、その「各行」の前にオベルス⁴すなわちやりのしを付した」と書いている。

(6) ヘブライ語本は、神については一言も触れていないが（⁴注⁶参照）、七十人訳は、神が本書の出来事の主動者であることを明確にしている。

(7) その民のためには勝利のくじ、諸国民すなわち異邦人のためには災いのくじ。

日として代々限りなくイスラエルの民の間に守られるべきである」。

プトレマイオスとクレオパトラの治世の第四年⁽⁸⁾、司祭でありレ

ギリシア語訳に ビ人と称していたドシテオスがその子プトレマイオスとともに、

ついての証言 プリムについてのこの手紙⁽⁹⁾を持って来た。これは本物で、エルサ

レムに住むプトレマイオスの子リシマコスによって訳されたもの

であると、かれらは言つた。

(8) このギリシア語訳すなわち七十人訳は、エルサレムのリングマックスによつてなされ(解説172ページ参照)、プトレマイオスとクレオパトラの治世の第四年目に、エジプトに持つてこられた。エジプトの歴史によると、アトレス、[16—108 B.C.] あるいはプトレマイオス十四世(51—47 B.C.)をさしてゐると思われる。プトレマイオス八世であれば、治世第四年目は紀元前一一四年である。

(9) これは七十人訳聖書中の全エスティル書、すなわち第一、第二正典全部をさすものと思われる。